

効率先の工業的手法を変えて 健全な「農と食」を取り戻す道を

狂牛病。家畜福祉。遺伝子組み換え作物をめぐって



30年前はごく当たり前だった放牧風景がめっきり減り、自給飼料が生産できる土地が広がる北海道でも工業的な酪農が増えている(写真右、別海町内)

ルポライター 滝川 康治

連載は2002年夏から始まり、すでに40回を数えた。後半の約2年は、遺伝子組み換え(GM)作物の栽培規制条例をめぐる動きをはじめ、家畜福祉や有機農業、グリーンツーリズムなどを取り上げることが多く、「北の大地」が抱える可能性や課題が浮き彫りに……。最近の出来事や取材時の裏話を交えながら、2回に分けて「中間リポート」をお届けする。

いびつな生産構造を問い 狂牛病の感染源など探る

ライブドア前社長の逮捕劇があった一月二十三日、農水省は国内二十一例目となる狂牛病(牛海綿状脳症)BSE)が確認されたことを発表した。根室管内別海町の牧場で飼育されていた二〇〇〇年九月生まれの乳牛で、その三日前に死亡し、検査に回されていた。死亡牛では五頭目のケースになるが、ホリエモン騒動にかき消され、新聞やTVニュースの扱いはごく小さいか皆無であった。

これで、確認された北海道生まれの感染牛は十六頭(全体の約7割)に上る。かつて意識的に肉骨粉や血粉などを与えていた農場のなかから感染牛が発生したのは今回が初めてだ。感染源と感染経路はいまだ解明されぬ状況は変わらず、シワジワと確認頭数が増える——そんななか少しずつ実態が明らかになってきた。

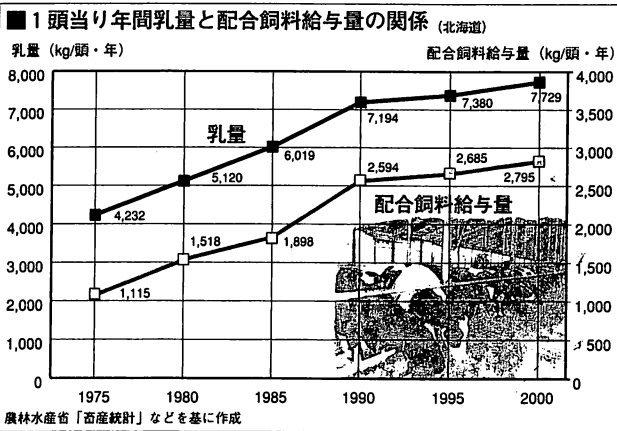
本誌〇五年八月号でわたしたは、感染牛の出生時期と感染源について分析した。九五―九六年に生まれた牛が十三頭と大きな集団を形成している。そのすべてに全農系の科学飼料研究所(群馬県)が製造した代用乳を飲ませており、原料のオランダ産の牛脂が感染源の疑いが濃厚——と、畜産研究者の論文などに基づいて指

摘。さらに、「気になると」として、二〇〇〇年生まれの子牛が増え、十勝で集中発生している事実も示した。

今回の確認によって、その二〇〇〇年生まれの感染牛が合計五頭になり、地域的には道東と道央に偏在している。感染源は、代用乳の原料の牛脂や血漿タンパク、それとも肉骨粉類なのか、まだわからない。この集団は増え続けるはずであり、今後の行方を注視しつつ調査を続けたい。

アジアで初めて狂牛病が確認されてから間もなく五年になるが、感染牛の出生地が北海道に集中したのは、全国の乳牛の半数が飼われているためだけではない。

わたしが農業高校生だった三十数年前、「酪農の基本は土・草・牛の循環」と習った。が、その後の酪農・畜産は大きく変貌し、「循環」から遠ざかる一方だった。「卵は物価の優等生」とよく言われる。その値段の安さは、鶏の行動の自由を奪う狭いケージのなかで外国産の安い穀物を食べさせ、大量生産することで可能になった。続いて豚や肉用牛が工場畜産化し、しんがり乳牛である。



いまでは、外国産の穀物を主体にした濃厚飼料を大量に食べさせて牛乳の生産量を増やし、わずか二―三産、人間でいえば三十代くらいの若さの牛を用済みにして屠場に送る、いびつな酪農が主流になってしまった。草地面積が広い北海道でも、輸入牧草を食べさせる農場が増え、「土・草・牛」が循環する農業のあり方が失われた。これでは健全な「食」は保証されるはずもない。

そんな生産構造の変化と経済のグローバルズムの下で日本列島に狂牛病が上陸したわけで、「起きるべくして起きた薬病」とわたしは表現してきた。この病気の根源には、牛たちの健康を軽視した効率優先の飼いがあつた。だから、中間のシステムをいじりまわすよりも、生産構造のひずみを正していくことを優先させるほうが根本的な清浄化対策になるはず——と、あらためて強調しておきたい。

ここに乳量と配合飼料の給与量の相関を示すグラフを再掲した。この右肩上がりのカーブのなかに、牛たちの悲鳴や規模拡大でゆとりを失った農場の状況が表れている。その延長線上に狂牛病が発生した……。そんなふうを感じ取れる、かしい消費者が増えてほしいものだ。

年明け早々、輸入を再開した米国産牛肉に特定危険部位(SRM)の脊柱が混入していたことが明らかになった。さらに、閣議決定した食肉処理場の事前査察をやつていなかったことも発覚し、国会で大きな問題になっている。

本誌八月号のなかで、「牛が糞尿にまみれていて品種確定が間違つてしまい、また、サンプルの組織が他の組織と混じつ



GM作物の規制条例をめぐり、腰の定まらない道の検討会で意見を述べる消費者委員(04年10月、札幌市内で)

健康で幸せな家畜から
安心な食品を提供できる

健康で幸せな家畜から
安心な食品を提供できる

昨年の連載のなかでわたしは、「家畜の健康と福祉」をめぐる話題を計四回にわたってレポートした(6・7・10・11月号を参照)。

GM作物の規制条例をめぐり、腰の定まらない道の検討会で意見を述べる消費者委員(04年10月、札幌市内で)

脱却する——といった積み重ねのなかで、工業的な畜産のありようを正していくしか明日への希望はない。生産拡大の道をひた走ってきた北海道の畜産だが、足下を見つめれば、自給可能な土地や「土草・牛の循環」に忠実な取りくみは各地にある。この連載でも、そうした実践を引き続き紹介していきたい。

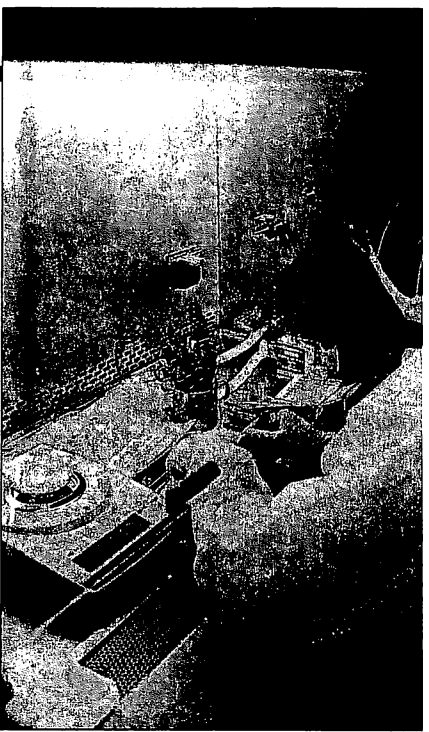
GM大豆の栽培騒ぎの経緯めぐる農家の話から

由を真っ先に言わないといけない」と。といった真つ当な発言が相次いだ。が、残念ながらこうした意見はまだ少数派である。規模拡大による利益追求の流れは止まらないし、「家畜福祉?」じゃ、人間の福祉のほうはどうなるんだ」と反発する生産者も多い。

GM大豆の栽培騒ぎの経緯めぐる農家の話から



長沼町の農家がGM大豆の栽培を計画し、大きな波紋を広げた。地元の農協を訪れて「栽培拒否」へ提議を求める市民団体の人たち(04年10月)



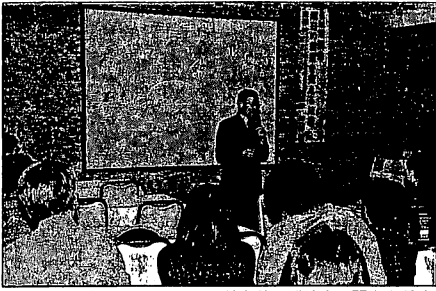
連日行なわれる狂牛病の簡易検査。アメリカとは対照的な全頭検査が消費者の安心感につながった

狂牛病問題を生産システムの視点から考えることが多い。今回のケースでも、食肉の安全性の面から捉えるだけでは本質を見失うのではないだろうか。

狂牛病問題を生産システムの視点から考えることが多い。今回のケースでも、食肉の安全性の面から捉えるだけでは本質を見失うのではないだろうか。

狂牛病に感染することの怖さはもちろんだが、「鶏糞を食べた米国の牛の肉」を食する気になれるだろうか。

狂牛病に感染することの怖さはもちろんだが、「鶏糞を食べた米国の牛の肉」を食する気になれるだろうか。



GM作物を売りこむモンサント社主催の講演会。関心を示す大規模農家も(05年2月、札幌市内で)

場主に取材要請すると、

「貴方には問題ないけれど、北方ジャーナルの取材ならダメだ」と拒否された。過去に何かあったのか、ついに明らかにしなかったが、本誌が嫌いらしい。わたしはもちろん、編集長も説得に努めたが応じてもらえず、一連の連載のなかで当事者の意見を紹介することはできなかった。

後日、その農場主から話を聴く機会があった。有限会社をつくって八十数ヘクタールの畑に小麦や大豆を作付けしている彼は、わたしよりも四歳若い。けつこう勉強家で英語はペラペラ、農閑期には渡米して情報収集をすることが多いとか。わたしとは正反対に、効率万能のアメリカ

カ農業を信奉する人物である。一番気になっていたのは、この農場主は過去にもGM大豆の栽培経験がある、という点だ。本人に事実関係を尋ねると、次のような答えが返った。

①(GM作物の商業栽培が認可された)九六年、モンサント社が開発したGM大豆をアメリカの農家から分けてもらい、自宅のプラントナーに十粒ほど蒔いてみた。ラウンドアップ(同社製の除草剤)を大豆にかけても枯れないので、「本格的に作りたい」と思った。

②九七、九八の二年間、自分の農場五ヘクタール前後でGM大豆を栽培した。種子は、知人に頼んでアメリカのカントリーエレベーター内のモンサント代理店で買ってもらった。購入にコネはいらない、カネさえ出せばOK。外国で車を買うのと同じこと。「雑草が生えず」と楽しんだ。素晴らしい大豆だと感じた。

③収穫したGM大豆は空知管内の業者に売った。「GM」と言わなかったし、先方も聞かなかった。

④当時、十勝や網走などの農家がうちの大豆畑を見学した。「ラウンドアップをかけても枯れないよ」と百人くらいに説明している。

「日本で初めてGM大豆を商業栽培した男」の話を長々と紹介したのは、二年間で三百俵(60kg/俵)近いGM大豆が、そ

れと識別されることなく味噌や豆腐、納豆などに加工され、食卓に上っていたからである。GM作物、食品を敬遠する消費者は圧倒的に多いし、人体や生態系におよぼす長期的な影響も解明されていない。「消費者のことは考えていない」と無責任に言い放つこの農場主が語った栽培の経緯は、なんとも怖い話だし、あの騒動のなかで一番深刻な問題だったのではないかとあらためて思う。

GM試験栽培に抜け道も腰砕けになった道の対応

GM作物をめぐる記事のなかでわたしは、「農家による一般栽培はダメ」「研究機関による試験栽培はOK」という、道が打ち出したダブルスタンダードを強く批判してきた。

「道産食品の安全・安心」を売りこもうとする道は当初、「開放系での栽培の中止」を求めるきびしいガイドラインを策定しながら、研究機関などの栽培試験に抜け道をつくってしまった。バイオ推進団体や経済界、一部研究者らの反発に配慮したためである。

これが命取りになり、条例制定に向けた取りくみは腰砕けになっていく。経済界は「研究の芽を摘むな」と自民党や知事サイドに働きかけ、矛盾した方向に大

きく後退。道庁内でも、規制に積極的な農政部と経済界べつたりの経済部との対立があり、前者が敗北した。

道内を代表する経済団体から取材したときの雑談。「対応した幹部職員は有機農業について、「ウンコやおしっこをばらまいてやる農業。そんなので良い作物ができるの?」といったお粗末な見方を披瀝した。本道経済にもたらす農業の価値をよく理解していないようだ。GM作物についても申しり、であった。

種の壁を超える手法で新たな作物をつくることは、自然の摂理を冒瀆するもの。生態系への悪影響もある——というのが、GM作物に対するわたしの基本姿勢。同じ開放系での栽培なのに、「試験」と「一般」で異なる対応をすることは差別ではないだろうか。矛盾する方針を決めた道には、「GMフリーの大地をつくり、消費者の期待に応えていく」という理念や哲学が欠けていたのである。

GM作物の栽培問題は、ある時期に推進の機運が再燃することが予想される。「食の安全・安心」にむけた各界の取りくみや、静かに広がるスローフードや有機農業などの動きとGM作物の栽培とは決して相いれない。そうした視点を基本にしつつ、この北の大地から「農と食」のありようを考えていきたい。

(次号につづく)